

## 歴史的・科学的側面から見る

### インド楽器の音響学

アマラグ・グプタ教授 ([ag@iitk.ac.in](mailto:ag@iitk.ac.in))  
インド工科大学カンプール校 機械工学部

【日時】2017年3月1日、15:00~16:00

【場所】センター棟 C階 C209

## セミナーの

## ご案内

どなたでもご参加いただけます。

インド楽器の歴史的・科学的研究は、民族音楽学、音の伝播に関するもの、そして音響学において、新しい世界へと導いてくれます。

今回のセミナーでは、そのインド楽器をとりあげ、ユニークな構造をハイライトしてご紹介し、それと同時に、考古学や楽器製作に関する話題を展開します。ここでは、マルチメディア機器を使用した音源サンプルと共に、対話型でお届けします。これらの話題からは、日本の楽器とのつながりも感じられることと思います。

タンプーラ、シタール、スルバハール、ルドラ・ヴィーナなどのいろいろな撥弦楽器は、カーブを帯びた胴部分、円形の(ふくべ製)共鳴器、ジュアリ(駒の弦に対し直角にある木綿糸)、共鳴弦、そして丸形の指板など特徴のある形状を受け継いでいます。これらの楽器が歴史的にどのように発展してきたのかを紹介しながら、各部分の機能の音響的な重要性にも焦点をあてます。

また、関連する分野における最近の実験やモデル化も併せてご紹介します。インドの膜鳴楽器(ドラム)は世界の中でも、その音楽的機能と豊かな音源という特徴から、とてもユニークな存在であります。またドラムは、時間や拍のリズムを取るという役割も持ち合わせています。セミナーでは、2種類のドラムをについてお話します。1つは、ドラムの膜を使って、張力を変化させることで豊富な倍音を作り出すタブラ、パカーワジ、ムリダンガム。そして2つめは、張力と紐の締め具合で音程を巧みに生み出すイダッカやダムルです。後者は、日本の鼓(つづみ)と多くの部分でつながりのある楽器です。

このように、インドのドラム楽器類についての、私たちの実験とモデル化についてのセミナーへご招待したいと思います。



ご質問ございましたら、ソフトマター数理ユニット(フリードユニット)の徳本([naoko.tokumoto@oist.jp](mailto:naoko.tokumoto@oist.jp))までご連絡ください。